

ブラジルの金利引き上げについて

2014年1月16日

ブラジル中央銀行は1月15日(現地時間)の金融政策委員会において全員一致で政策金利の0.5%の引き上げを決めました。これで同国の政策金利(翌日物国債レボ取引金利: Selic)は10.50%となり、昨年4月以降7会連続の引き上げとなりました。市場関係者の予想を上回る利上げ幅(予想は0.25%)となりましたが、実施後も金融、為替市場での影響は限定的でした。

《政策金利引き上げの背景》

実施の背景には引き続き①インフレ抑制、②自国通貨の安定が挙げられます。

①ブラジルでは、通貨安による輸入物価の高止まりや国際的なスポーツイベントを控えインフラ整備を中心とする財政支出の拡張によりインフレ率が高い水準にとどまっています。昨年12月に公表された四半期インフレレポートにおいて同低下には時間を要するとの主旨、記述がみられたことから利上げ観測が再び強まりました。中央銀行が指標とするインフレ率(IPCA前年比)は12月が5.91%と小幅ながらも上昇しています。

②ブラジルレアルに関しては、昨年5月～8月にかけての急落を受けて、通貨当局より大規模市場介入を中心とする通貨防衛策が発表されました。9月には米国の量的緩和の縮小開始の見送り、10月には同債務上限問題の議会合意と新興国通貨にとって好材料がみられ、ブラジルでも10月、11月と政策金利の引き上げが実施されたため、ブラジルレアルは一時的に反発しましたが、反発局面は短期間で終了し、再び軟調な展開となっております。

同国では経常赤字を補うため海外資本の流入を促していますが、12月の米国金融政策の転換を受けて資本の流出が懸念され始めていることもあり、市場介入に加え金利を高くすることで流出を抑制し通貨の安定を企図しているようです。

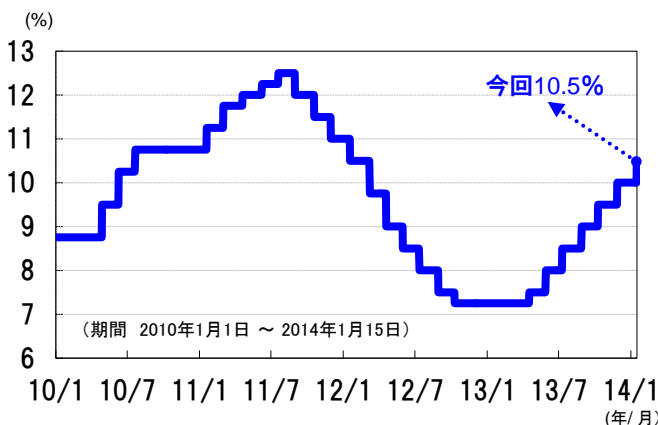
《今後の見通し》

景気については回復にやや時間を要するとみています。内需については個人消費に持ち直しがみられるものの全般に低調ですが、外需については中国景気が底入れしたことや米国経済が好調なことから下支えとなることが期待されます。経常収支の改善が遅れていますが、一方で基礎的財政収支が2013年の目標黒字額を達成するなど経済ファンダメンタルズの改善もみられます。インフレ率については同国および中央銀行の目標(4.5%±2%)内に収束しており、今後緩やかな低下に向かうとみられます。政策金利についてはインフレ率が高止まりを続けていることから、追加利上げも予想されますが、景気への配慮も必要なことから引き上げ幅は0.25%に縮小するとの見方が多くなっています。

為替レートについては米国金融政策の不透明感が後退したことやこれまでの下落による水準訂正、予想される政府・中央銀行による市場介入などから、下値不安は薄らぐものと思われます。ただし状況によっては安全資産選好の動きが強まる局面があることも考えられます。

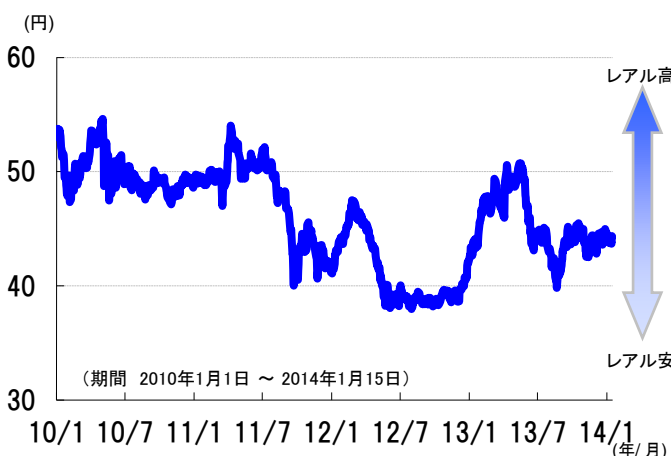
当社でも引き続き同国に関わる市況動向を注視してまいります。

《ブラジルの政策金利》



出所：Bloombergより明治安田アセットマネジメント作成

《ブラジルレアルの対円推移》



出所：Bloombergより明治安田アセットマネジメント作成

- 当資料は、明治安田アセットマネジメント株式会社がお客さまの投資判断の参考となる情報提供を目的として作成したものであり、投資勧誘を目的とするものではありません。また、法令にもとづく開示書類(目論見書等)ではありません。当資料は当社の個々のファンドの運用に影響を与えるものではありません。
- 当資料は、信頼できると判断した情報等にもとづき作成していますが、内容の正確性、完全性を保証するものではありません。
- 当資料の内容は作成日における当社の判断であり、将来の運用成果を示唆あるいは保証するものではありません。また予告なしに変更することもあります。
- 投資に関する最終的な決定は、お客さま自身の判断でなさるようお願いいたします。